満田 美幸

解館港イルミナシオン映画祭 第19回シナリオ大賞







受賞歴なし

1977年生まれ。埼玉県在住。おおつぼてつろう

みぞたみゆき

ランプリ奨励賞受賞。ヤングシナリオ大賞最終選考、第23回シナリオSーグ終選考、創作テレビドラマ大賞最終選考、フジテレビ

る(現在も在籍)。伊参スタジオ映画祭シナリオ大賞最

2008年よりシナリオセンターにて脚本を学び始め

【あらすじ】

1300円で働くのだ。勿論このことは誰守中の二週間、ミカの替え玉となり時給的マスカラスと雇用契約を結ぶ。ミカが留館女子プロレス所属の覆面レスラー、ミ

にも秘密だ。

む事を心に誓う。

珠代には高い時給の他に、この仕事をど 珠代には高い時給の他に、この任事をど ないに行ったが、無下に追い出されてしまう。自 だったが、無下に追い出されてしまう。自 だったが、無下に追い出された娘のエリカが、
一度はエリカに近づくには、
覆面
を被り素顔を隠すしかなかったのだ。

対する苦しい想いを知り、本気で試合に臨事は、プロレス教室の講師にまで発展している。さらにひろめ祭りで行われるエリカと重ねる珠代はその厳しさに逃げ出したくなる。しかしエリカの祭りで行われるエリカと猛練

てギブアップしようとしなかった。代わる。運命の悪戯に戸惑いつつ珠代は、別の育ての母、よし子がいた。リング上で娘との最後の試合に臨む。観客席にはエリ娘との最後の試合に臨む。観客席にはエリーがある。運命の悪戯に戸惑いつつ珠代は、

エリカと珠代は場外へ。エリカに投げら

を失う。 安堵したのも束の間、 見てエリカは驚き、 れた珠代はよ 珠代は夢中で覆面を取る。その素顔 しかし覆面が邪魔してうまく 慌てた珠代はよし子に人工呼 し子の上に落ち、よし子 意識が戻ったよし子に 自分を騙していた珠 i かな んは気 吸を

を

分が珠代から、赤ん坊だったエリカを奪 代を責める。そんなエリカによし子は、

É

つ

のフェリーに乗る。デッキに立つと娘と過 パートの契約が終了した珠代は、 函館発

た過去を打ち明ける。

に リカが走ってくる。桟橋で手を振 ごしたこの二週間が甦ってくる。そこにエ .珠代は覆面を高く掲げ、手を振り返すの るエリカ

だった。

【人物表】

長洲よし子(30)(55)エリカの育ての母長洲エリカ(25)女子プロレスラー長洲エリカ(25)女子プロレスラー

響子(35) 女子プロレスラー道産子(27) 女子プロレスラー

○水産加工工場・中

並んで立ち、一斉にイカをさばいて 白い帽子と白い作業着姿の女たちが

いる。

その端で作業する山田珠代 (17)。

き出せず、おたおたしている。 イカの胴体からワタと足がうまく引

に向かって真っすぐに歩いてくる。

長洲よし子(30)が、怖い顔で珠代

気配に気づいて顔を上げる珠代。

よし子が珠代の頬を思い切り叩く。

珠代、イカを持ったまま後ずさる。

よし子「人の亭主に手を出すなんて。どう

いうつもり?」

よし子「何か言ったらどうなの」

珠代の隣で作業していた女の手から、

包丁を奪うよし子。

パートの女たちの悲鳴。

よし子、珠代に刃先を向けようとし

て止まる。

よし子「……あんた、まさか」

珠代の腹の膨らみを見る。

長洲の声「よし子、やめろ!」

同じく白い作業着を着た長洲あきら

(30) が走ってくる。

パートの女が珠代に耳打ちする。 長洲を振り返って見るよし子。

パートの女「あんた、今のうちに逃げな」

珠代「……」

走って逃げる珠代。

長洲、よし子の手から包丁を奪う。

長洲「何やってんだ」

よし子「そんな。あんた……あんまりだよ」 へなへなとその場に座り込むよし子。

長洲「……」

顔を手で覆うよし子。

二人を見つめるパートの女たち。

○同・前

走って出て来る珠代。

長靴をはいた足がもつれて転ぶ。

手にしていたイカが転がる。 地面に倒れる。

珠代「うう」

腹に手をやる。

珠代「う……産まれる……」

○病院・分娩室・表

静寂の中、突然赤ん坊の激しく泣く声。

○函館港

「蛍の光」が流れる。

汽笛と共に、青函連絡船が出港する。

デッキに立ち、遠ざかる函館港を見

つめる珠代。

)山本水産・表

「山本水産」の看板。

一台の車が停車している。

「北島清掃」の文字。

)同・作業場・中

汚れた床をポリッシャーで掃除する、 7

清掃員。

清掃員「山田さん!」

壁に貼られたポスターをじっと見て

いる珠代 (42)。

珠代は体が大きく、ボテッとしている。

ポスターには「函館女子プロレス

函館朝市大会」のタイトルに、出場

選手達の写真が載っている。

一人の選手に釘付けになっている珠

代。

珠代「……」

清掃員「山田さんって!」

珠代「あ、はい」

清掃員「ぼけっとしてんじゃねえよ、かっ

珠代「ああ、すいません」 ぱぎ早くしてくんねえとさ、拭けねえべ」

て、床の汚水を捌いていく。

珠代、持ち手の長いゴムベラを使っ

珠代、ぎこちない手つき。

スターをチラチラと見ている。

珠代、かっぱぎしながらも、

清掃員「よそ見してねえで、ちゃっちゃと

やれって」

珠代「はい」

珠代、ワックスの入ったカンを倒す。

大量のワックスが床一面に広がる。

清掃員「おい!」

珠代「すいません」

清掃員「いいからモップ持ってこい」

珠代「はい」

珠代、ワックスに足を滑らせてひっ

くり返る。

8

清掃員「なにやってんだよ。もうやめちまえ_

珠代「すいません」

○同・珠代のアパート・居間・中 夜

珠代、「函館女子プロレス」のポスタ

ーを見ている。

長洲エリカ(25)の写真と名前

珠代「エリカ……」

○函館ターミナル

フェリーが近づいてくる。

デッキに立っている珠代。

)函館朝市大駐車場・中

駐車場の柵に垂れ下がった横断幕に

「函館女子プロレス」の文字。

響子ー!」

それを取り囲むように作られた客席 駐車場の中央に設営されたリング。

は、大半が埋まっている。

客席の所々に、選手の名前の入った

幟が立っている。

リング上、タッグを組んだ選手達が、

両コーナーに分かれて立っている。

リングアナウンサーが選手の紹介を

する。

リングアナ「赤コーナー、155パウンド、

道産子ー!」

リングアナ「赤コーナー、150パウンド、 道産子(27)が四股を踏む。

客席から紙テープが投げ込まれる。 響子(35)が客席に一例する。

両手に荷物を抱えた珠代が、ドカド

力とやってくる。

大きな体で客をかき分けるようにし

て席に着く。

Tシャツを着始める。 珠代、エリカの顔がプリントされた

アナウンサー「青コーナー、150パウンド、

エリカー!」

エリカ(25)が片手を上げる。

それぞれ「エ」「リ」「カ」の文字が 珠代の隣の席の三人組が立ち上がる。

入ったTシャツを着ている。

エの男「エ!」

カの男「カー!」 リの男「リ!」

一同「エリカー!」

三人組が紙テープを投げる。

珠代、カの男に紙テープを渡される。

珠代もつられて紙テープを投げる。

アナウンサー「青コーナー、165パウンド、

ミカ・マスカラスー!」

覆面レスラーのミカ・マスカラス (30) が両手を上げる。

客席から、紙テープが投げ込まれる。

ゴングが鳴る。 エリカと道産子が向かいあう。

ゴングと同時にエリカが道産子にド

ロップキックを仕掛ける。

○同・表(夕)

選手が一列に並んで、ファンと握手

をしている。

10

エリカの前にファンが列を作ってい

る。

珠代、ファンをかき分けて、 エリカ

の前に出る。

エリカ「あの、順番守ってください」

珠代「エリカ、会いたかった」

エリカ「(呆れて) ……どうも」

珠代、ぎゅっとエリカの手を握る。

珠代「こんなに大きくなって」

エリカ「あの……」

エリカ「すみません。他のファンの方もい 珠代「目元なんて私そっくりだし」

らっしゃるんで、先に進んでもらえます

か

珠代「そんな冷たい言い方。ようやくこう して会えたのに」

エリカ「え」

ないのも無理ないけど」

珠代「生まれてすぐだったから、

覚えてい

エリカ「……まさか」

珠代「そうよ。私はエリカの:

エリカ「帰ってください」

珠代「エリカ」

エリカ「今更何しに来たの」

エリカ、珠代の手を払いのける。

珠代「エリカ、ちょっと待って」

エリカ「エリカなんて気安く呼ばないで!」

と、エリカに押され、倒れる珠代。

珠代「……」

エリカ「この人、外に出してくれます?」

と、スタッフに声をかける。

スタッフ、珠代を抱えて連れ出す。

11

珠代「いや、ちょっと何するの!エリカ!」

エリカ、怪訝な顔で珠代を見る。

外に放り出される珠代。

スタッフがチラシを配っている。

珠代、チラシを受け取る。

ストレス発散、運動不足解消!
女子ラシに「プロレス教室参加者募集

珠代「選手が優しく教えます」性限定」の文字。

○函館女子プロレス道場・表

潰れた昆布加工工場を利用して作ら

れた道場。

「函館女子プロレス」の看板。

道場に入って行く若い女性の参加者珠代、チラシを見ながらやってくる。

達。

珠代、中に入らず窓の外から中を覗う

いている。

道産子「ミカさん、参加者きてますか?」珠代の背後に道産子がやってくる。

珠代、じっと中を覗いている。

と、珠代の肩をポンと叩く。 道産子「ミカさん? どうしました?」

振り返る珠代。

道産子「あれ?」

珠代「はい?」

道産子「いえあの、何か?」

珠代「今日、エリカは」

道産子「エリカ? いますけど」

珠代、チラシを見せる。珠代「あのこれ、私も参加できます?」

道産子「ああ、プロレス教室に参加の方で

珠代「そうなの、ちょっとやってみたいな

すか」

って

道産子「大丈夫ですよ、女性なら誰でも参

加可能なので、どうぞ」

珠代、中に入っていく。

○同・事務所・中

電話をしている大柄な女性、ミカ。

壁に貼られた「恋愛禁止」の張り紙。

ミカ「えーじゃあ、好きって言って」

男の声「照れくせぇからいいよ」

男の声「ったくもう、何て言えばいいの?」てくれたら頑張れるから」

男の声「世界で一番愛してるよ、頑張れ」ミカ「世界で一番愛してるよ、頑張れって」

ミカ「名前もつけて」

ミカ「言って言って言って言ってー」 男の声「もう良いだろ」

道産子、入ってきて

道産子「ミカさん、参加者集まったんで、

そろそろ始めましょう」

ミカ、電話を隠して

ミカ「よし、すぐ行く」

ミカ、再び電話に戻る。

かも」
ミカ「言ってくれないと、ミカ頑張れない

ミカ「世界で一番が無い」
男の声「ミカ、愛してる、頑張れ」

男の声「ミカ、世界で一番愛してる、頑張れ」

ミカ「うん」

と、電話を切ろうとして

ミカ「あ、明後日、なるべく早く行くよう

にするから」

ミカ、電話を切る。

バッグから覆面を取り出して被る。

ミカ、腕を回して出て行く。

○同・道場・中

中央にリングが設営されている。

リングの上に珠代を含む十人ぐらい

の参加者達。

ミカと道産子が教えている。

をする参加者の中、珠代だけ横に転 ロープの端から端まで、難なく前転

がる。

珠代「いてててて」

珠代「コツを教えてよ、コツを、ねぇ」 道産子「大丈夫ですか?」

エリカがやってくる。

他の参加者に同意を求める珠代。

エリカ「おはようございます」

参加者達「おはようございます」

珠代「おはよー」

エリカ「あっ!」

エリカ、リングに上がる。

エリカ「そこで何してるのよ!」

他のレスラーや参加者がエリカを見

珠代「何って。プロレス教室に……」

エリカ「帰って!」

珠代「誰でも参加していいって、そうよね?」

珠代、道産子を見る。

エリカ「しつこい、帰れ!」

とする。 エリカ、珠代をリングから降ろそう

珠代「ちょっと。危ないでしょ」

道産子「おい、エリカ、落ち着け」

道産子、エリカを止めようとする。

おかしいんですから」エリカ「ほっといてください。この人、頭

珠代「エリカ、お母さんに向かってその言

い方はないんじゃない」

エリカ「いい加減にしてよ」道産子「お母さん?」

珠代をリングから引きずり下ろすエ

リカ。

抵抗する珠代。

珠代の背後から、響子(35)が近づ井井。

いてくる。

響子「おいミカ!何してんだ!」

道産子「響子さんその人違います」

響子「え?」

道産子「その人、エリカのお母さんです」

響子「お母さん?」

響子「ほんとだ。なんだそうだったの。失珠代の顔を確認する響子。

礼しました」

エリカ「違います!母でもなんでもありま

響子「じゃあ誰なのよ」せん」

珠代「私はエリカの実の……」

エリカ「違うって言ってんでしょ!」

エリカ、珠代に手を振り上げる。

ミカ、エリカの手を掴む。

ミカ「誰か知らないけど、素人に手出すな」

エリカ「ミカさん……はい」

ミカ「あの、今日は帰ってください」

珠代、睨むエリカを見て

珠代「わかりました」

ミカが珠代を外に連れ出す。

ミカに連れられて出てくる珠代。

珠代「なんかごめんなさいね、迷惑かけて」

ミカ「エリカのお母さんって本当ですか」

ミカ「お名前はなんて」 珠代「まぁ色々あって、でもそれは本当」

珠代「山田珠代」

ミカ「山田さん明後日は何を?」

ミカ「チケット一枚余ってるんで、試合観 珠代「明後日?」

に来ないかなって」

珠代「え、いいんですか?お金は」 ミカ「あ、タダでいいんで。その代わり、 るんですよ」 ちょっとだけ手伝ってもらいたい事があ

珠代「手伝い?まぁ……私で良ければ」

ミカ「本当?じゃあ来て頂けますか」

珠代「わかりました」

ミカ「でも、くれぐれも騒ぎは起こさない

ようにお願いしますね」

珠代、ミカからチケットを渡され帰 って行く。

○ショッピングセンター・駐車場

「函館女子プロレス」の横断幕がかか

っている。

試合をするミカと道産子。

客席は半分ぐらい埋まっている。

その中に珠代の姿。

リングサイドで試合のサポートをす

る

エリカや他の選手達。

ミカ、殺人ドロップキックが決まり、珠代、エリカの様子をじっと見ている。

道産子をフォールする。

レフェリー、カウントを取る。

レフェリー「ワン、ツー、スリー」

ゴングが鳴らされる。

× ×

珠代の隣には、「エ」「リ」「カ」のTエリカと響子が試合をしている。

シャツを来た、三人組のファン。

珠代、一緒に応援している。

エの男「エ!」

カの男「カー!」リの男「リ!」

珠代「エリカー!」

弐力の声「山田さん」

カが手招きしている。

珠代、振り返ると、ジャージ姿のミ

珠代「?」

珠代、席を立つ。

○同・選手控え室・前

テントで作られた控え室。

「選手控え室」の張り紙。

珠代の声「私が?」

○同・中

素顔のミカに覆面を被らされている

珠代。

ミカ「大丈夫、ファンと握手するだけです

から」

珠代「さすがにわかるでしょ」

ミカ「ちょっとまっすぐ立って」

珠代、まっすぐ立つ。

ミカ「右向いて」

珠代、右向く。

ミカ「左」

珠代、左向く。

ミカ「後ろ」

珠代、後ろを向く。

ミカ「胸張って」

珠代、胸を張る。

ミカ「歩いて」

ミカ「もう完璧です、私そっくり。合格!」 珠代、歩く。

珠代「本当に?」

ミカ「覆面を被ってる間、山田さんはミカ

マスカラスですよ。気を抜かないように

お願いします」

珠代「はあ……でも」

ミカ「エリカも一緒ですから」

珠代「エリカも?」

ミカ「そうです。じゃ、よろしく」

ミカ、まとめた荷物を持って出て行く。

珠代に微笑むエリカ。

○同・物販販売コーナー

選手達が一列に並び、ファンと握手

している。

珠代 「落ち着け、落ち着け」

ブツブツと呟く。

隣に立つエリカ。

エリカ「何ブツブツ言ってるんですか?」

珠代「エ、エリカ」

エリカ「どうしたんですか。そんなに驚いて」

珠代「いや、別に」

エリカ「その声。風邪ですか?」

珠代「あ、うん」

エリカ「大事にしてくださいね」

珠代「……うん」

家族連れがやってきて、珠代の前に

その顔を見て、嬉しそうな珠代。

父「あの、うちの子がミカマスカラスさん の大ファンで、抱っこして写真撮りたい

って聞かないんですよ、いいですか?」

珠代「ええ、どうぞ、どうぞ」

父「ありがとうございます」

と、後ろに隠れている子供に

父「写真撮ってくれるって」

すごく太っている。

恥ずかしそうに姿を現す子供。

珠代「は?」

父「よし太郎、抱っこしてもらえ」

珠代「え、ちょっと!」

珠代、太郎を持ち上げる。

珠代の腕が重さでプルプル震えてい

父、カメラを構えながら、納得いか

ない表情。

父「んー」

珠代「は、早く」

父「太郎をもう少し上にお願いできます

か?

珠代「上?」

珠代、渾身の力で太郎を持ち上げる。

珠代「よいっしょ!」

父「はい、撮りまーす、笑って」

太郎、満面の笑み。

父「ミカさんも笑って!」

珠代、口だけ笑う。

父、シャッターを押す。

父「ありがとうございました」 珠代、太郎を乱暴に下ろす。

家族連れ、帰って行く。

珠代、肩で息をする。

男の声「あの、私たちも今の人みたいに写 真撮ってもらいたいんですけど」

珠代、見ると子供をたくさん連れた

大家族が立っている。

呆然とする珠代。

)函館女子プロレス・事務所・前

ミカの声「えーっ!」

○同・中

携帯を落としかけるミカ。

慌てて耳に当て直す。

ミカ「世界一周旅行?」

男の声「2週間のクルージングだ。信じら

れるか?」

ミカ「信じられない。本当に商店街の福引

きで当たったの?」

男の声「そうだよ。もちろん行くだろ?」

ミカ「行く行く。いつから?」

男の声「明後日」

ミカ「明後日? そんな急に」

男の声「試合か?」

ミカ「試合はないけど、プロレス教室の当

男の声「なんとかなるだろ、それぐらい」 番とか、握手会とかがあるの」

男の声「世界一周。タダで行けるんだぞ、 ミカ「そんな事言われても……」

こんなチャンス二度とないぞ」

ミカ「わかってるけど」

戸をノックする音。

ミカ「ごめん、誰か来たからまたかける」

ミカ、電話を切る。

ミカ「はい?」

戸を開けて、珠代が入ってくる。

ミカ「ああ、どうも」

珠代「ちょっとこれ全然バレなかった、 凄

いのね、この覆面」

珠代「エリカが、大事にしてくださいって」 ミカ「ね。大丈夫だったでしょ?」 珠代、袋からミカの覆面を取り出す。

ミカ「へ?」

ミカ「助かりました。ありがとう」 珠代「いや。何でもない」

珠代「何だったら、もっとお手伝いするけど」

ミカ「……本当に?」

珠代「はい?」

にやりとするミカ。

珠代「今は何も」 ミカ「山田さんて普段何してるんですか?」

ん?

ミカ「2週間だけアルバイトしてみませ

珠代「アルバイト?」

道産子がやってきて、ドアを開ける。

覆面を被った珠代が立っている。

道産子「ミカさん、おはようございます」

珠代「ん、うん」

道産子「珍しく準備するの早いっすね」

珠代「ん、うん」

道産子、ドアを閉めて行く。

道産子「それじゃ、今日お願いしますね」

ミカ、机の下から出てくる。

珠代「でも私、プロレスなんてやったこと

ないけど、大丈夫?」

ミカ「2週間後には帰ってくるから、大丈

夫です」

珠代「でも、こないだみたいにプロレスを

ミカ「プロレス教室で実際に教えるのは道 教えたりするの、あるじゃないですか」

産子とかエリカだから、見てるだけでい

珠代「なるほど」

ミカ「時給は1300円でいいですか」

珠代「そんなに?青森の清掃のバイトの倍

ミカ「ただし、誰にも内緒にしてください。

人前で脱がないで。被ったままでいてくて振舞う事が条件です。あ、覆面は絶対それから、あくまでミカマスカラスとし

珠代「そうすれば2週間、エリカと一緒にださい」

ミカ「そうです。ずっと一緒です」

いられるのね」

珠代「ん。絶対脱がない」

覆面を深く被り直す珠代。

とめて払います」
ミカ「2週間分のバイト代は最後の日にま

一同・裏

覆面を被った珠代と、荷物を抱えた

ミカが歩いてくる。

ミカ「通常練習は午前中と午後」

珠代「そんなに?」

ミカ「午前中は基礎体力トレーニング、主

に筋トレで」

珠代「筋トレ」

ミカ「午後は個々で技の練習です」

珠代「技の練習」

適当にそれっぽいこと言ってれば、ばれミカ「立場的に練習を見る方が多いので、

珠代「それっぽいことを言う」る事はないと思います」

さい、後でなんとかしますので」ミカ「もしばれそうになったら逃げてくだ

トイレの前を通る。

珠代「あの、ちょっと緊張してきたのでト

イレいいですか?」

珠代、トイレに入って行く。

○同・トイレ・個室

珠代、覆面を被って用を足している。

珠代「大丈夫かな」

エリカの声「ミカさんおはようございます」

珠代 「! |

一同・表

ミカとエリカが入り口に立っている。

ミカ、顔を引きつらせて

ミカ「おおエリカ、早いね_

エリカ「プロレス教室の当番なんで。何し

てるんですか」

しようかと思って」

ミカ「ん?みんな来る前にトイレでも掃除

してたんですか?」エリカ「もしかしていつもこうやって掃除

ミカ「まぁ」

エリカ「もう、終わりました?」

ミカ「え、うん、まぁ」

ミカ「あちょっと、エリカ!」

エリカ、トイレに入ろうとする。

エリカ「はい?」

ミカ「最近力つけてきたよね」

エリカ「ありがとうございます」

ミカ「腕とか結構太いし、練習してる証拠」

エリカ、トイレに入ろうとしてエリカ「褒めてくれるなんて珍しいですね」

ミカ「ちょっとエリカ」

エリカ「なんですか」

ミカ「昨日ドラマ見た?」 エリカ「見てないですけど、先にトイレ行

ってきていいですか?」

くないぞ」

ミカ「どうしたエリカ、トイレなんてらし

エリカ「何言ってるんですか」 と、トイレに入っていく。

ミカ「エリカ!」

ミカ、中を覗く。

エリカ、二つある個室の空いている

エリカが入ったとすれ違いに、隣の 方に入っていく。

個室から珠代が出てくる。

○同・表

出てくる珠代。

珠代「ちょっと来るなら言ってくださいよ」 ミカ「びっくりした」

ミカ「こんな早く来るなんて思わなかった

から」

エリカの声「もう、やだぁ」

水を流す音。

ゃないですか」

エリカの声「ちょっと全然掃除してないじ

咄嗟に隠れるミカ。

珠代「あ、ちょっと」 出て来たエリカ、珠代を見て

エリカ「あれ、いつの間に被ったんですか?」 25

珠代「ん?まぁ、こういうのもプロレスラ

ーの技の一つだから、覚えておきなさい」

エリカ「はぁ」

エリカ、道場に向かっていく。

ミカ、顔を出して

ミカ「いいよいいよ、今みたいの、そうい う風に切り抜けてれば、2週間なんてあ っという間ですから」

ミカ、荷物を抱えて

ミカ「それじゃ、よろしくお願いしますね」

珠代、手を挙げる。

ミカ、荷物を抱えてこっそりと出て

行く。

○同・道場・中

リングの上、参加者のドロップキッ

クをミットで受け止めるエリカ。

道産子が指示を出す。

道産子「ミットを嫌いな人だと思って、力 いっぱいドロップキックしていいからね」

者。

次から次とドロップキックする参加

道産子「いいよー、その調子」

珠代、入ってくる。

参加者「おはようございます」

珠代、軽く会釈する。 リングから離れた場所をウロウロす

道産子「ミカさん、ちょっと変わってもら

っていいっすか?」

珠代、聞こえないふり。

道産子「ミカさん!」

珠代「何?」

道産子「変わってもらっていいですか」

珠代「何で?」

道産子「トイレ行きたいんで」

珠代「何で?」

道産子「もう、やばいんで」

道産子に変わって珠代がリングに上

がる。

参加者「あの、ミカさんの得意技、殺人ド

ロップキック見たいんですけど」

珠代「は?殺人?」

参加者達から拍手が起こる。

珠代「いや待って、え?」

急にやれって言われてもできないんです」エリカ「みなさん、あれは危険な技なんで

珠代「そ、その通り」

エリカ「だから、代わりに私がやります」

珠代「よっ、さすが!」

参加者達もつられて拍手。

エリカ「ミカさん、ミットいいっすか?」

珠代「え?」

珠代「あ、ちょっと、待って」
エリカ、キックミットを珠代に渡す。

エリカ「じゃ、行きまーす」

珠代「え、うそ」

珠代、咄嗟にミットを構える。

珠代のミット目掛けてドロップキッエリカ、ロープの反動を利用して、

クをする。

参加者達から拍手が起こる。珠代、弾き飛ばされる。

×

リング上にマットが敷かれている。

参加者が次々とセカンドロープから

両手足を広げて、マットに飛んでいく。

道産子「ダイビングボディプレスは何も考

えずに、鳥になったつもりで飛んでくだ

参加者「あの、トップロープから飛んだら

ダメですか?」

レス教室では禁止してるの、ごめんね」

道産子「トップロープは危険なので、プロ

参加者「(残念そうに)そうですか」

エリカ「代わりに私が手本見せましょう

道産子「あ、じゃあこうしよう、私とエリ

カとミカさんがそれぞれトップロープか 28

ら、ダイビングボディプレスを披露しま

す

参加者達から拍手が起こる。

リングの外に立っている珠代。

珠代「は?」

道産子「ミカさん、いいですよね」

珠代「えつ……ええつ?」

道産子「私とミカさんはトップロープから の飛び技が得意ですから、みなさんよく

見といてくださいね」

珠代「そんなの無理だって」

道産子「?」

珠代「あ、いや」

マット目掛けてダイビングボディプ エリカ、トップロープに駆け上がり、

レスをする。

参加者達から拍手が起こる。

道産子もトップロープに駆け上がる。

道産子「行くぞ、おらー」

ボディプレスを披露する。 と、トップロープから宙返りして、

参加者達から、大きな拍手が起こる。

道産子「ミカさん、お願いします」

珠代、顔を引きつらせてリングに上

がる。

全員の視線が珠代に集中する。

珠代「(呟く) どうしよう……」

道産子「ミカさん?」

珠代、コーナーポストに手をかける。

珠代「……」

エリカ「ミカさん、回転式お願いします」

珠代「……」

珠代、振り返る。

皆、じっと珠代を見ている。

珠代、ロープに足をかけて、

ゆっく

りと上がる。

珠代、トップロープに足をかけたま 珠代の足が震えている。

ま、動けなくなる。

道産子「ミカさん、どうしました?」

珠代、息が荒い。

道産子、珠代に近づく。

珠代「話が違う……」

道産子、珠代のすぐ背後から

道産子「ミカさん?」

珠代、トップロープにかけた足を滑

らせる。

珠代「あっ!」

滑らせた両足が、 道産子の首を偶然

挟む。

道産子、驚いて後ずさる。

その瞬間、掴んでいたロープから手

が滑り、珠代の体が捻るように落ちる。

られるように、飛ばされる。 テコの原理で、道産子の体が引っ張

道産子、マットに叩きつけられる。

道場内が静まり返る。

珠代、 何が起きたか分からず呆然と

する。

珠代「……」

道産子「ちょっとミカさん、フライングへ

びっくりするじゃないですか」 ッドシザースなんて聞いてないですよ、

珠代「フラ……へ?」

参加者達から拍手と歓声が上がる。 エリカも拍手する。

珠代、苦笑い。

○同・表(夕)

帰って行く参加者を道産子が見送っ

ている。

)同・道場・中(夕)

床をモップがけする珠代、手際がいい。 エリカ、珠代の手際の良さに呆気に

取られている。

エリカ「ミカさん、今日どうしたんですか?」

珠代「どうって?」

エリカ「そんなにテキパキ掃除するの初め

て見るんで」

珠代「そうなの?」

エリカ「しかも手慣れてますよね、今日の ミカさん、なんか業者の人みたい」

珠代「やってたから」

エリカ「え?」

珠代「昔ね昔」

エリカ「あの、ミカさん、彼氏がいるって

本当なんですか?」

珠代「本当?だって恋愛禁止って書いてあ

るじゃない、事務所に」

エリカ「ミカさんの事ですよ」

珠代「そ、そうよね」

エリカ「今日のミカさん、全体的にいつも より丸い感じがするし、幸せ太りって良

く言うじゃないですか」

珠代「気のせいじゃないかな」

いて、もしかしたら彼氏の部屋とか掃除

エリカ「掃除してる姿とか見ても、板につ

してるのかなって」

珠代「それは……」

エリカ「すいません、生意気言って」

エリカ、掃除を続ける。

珠代、エリカをじっと見ている。

エリカ、気づく。

エリカ「どうしました?」

珠代「ううん」

エリカ「ちょっとなんですか」 珠代、エリカの腕等をペタペタ触る。

珠代「プロレスラーにどうしてなったのか

エリカ「前に言いましたよ」 なって」

珠代「そうだっけ……」

エリカ「昔よく父と母と三人でプロレスを

観に出かけてて、いつしか憧れるように

なったって」

珠代「そんな事してたの」

エリカ「で、ある日、試合中に観客の一人

が倒れたんです」

珠代「あら」

エリカ「あらって、その時助けたのがミカ さんだった事も言いましたよ」

珠代「ああ、そうだっけ」

エリカ「試合中断してまで助けてる姿見て、

憧れるようになったんです」

珠代「あー、なってた、なってた」

エリカ「だから、ミカさんがタッグのパー

トナーに私を選んでくれたのが本当に嬉

しかったんです」

珠代「ヘー……」

エリカ「今はとにかく、ミカさんの足引っ

珠代「そっか、あの人意外と優しいんだね」 張らないように強くなりたいんです」

エリカ「え?」

珠代「ううん、あ、そうだ、写真一枚撮っ

ていい?」

エリカ「私の?」

珠代「うん、その、知り合いがエリカのフ

エリカ「ええ、いいですけど」 アンでさ、頼まれちゃって」

珠代「ミカには素直なんだから」

エリカ「はい?」

珠代「なんでもない、ちょっと待ってて」 珠代、カメラを取りに出て行く。

○ラーメン屋・店内(夜)

客の少ないラーメン屋。

覆面の珠代がラーメンを啜っている。

テーブルに、珠代とエリカが一緒に

写った写真。

嬉しそうに眺める珠代。

「はい、餃子お待ち」

と、写真の上に皿を置く。

珠代「ちょっ!」

)地獄坂 (夜)

細い坂を上っている覆面の珠代。

途中の神社を見る。

○ハコダテヤマ・ゲストハウス(夜)

軒家のような建物。

「ハコダテヤマ・ゲストハウス」 の札。

中に入って行く珠代。

○同・表 朝

朝日に照らされるゲストハウス。

)同・個室・中 朝

畳の部屋に転がるように寝ている珠

代。

窓から差し込む朝日が珠代を照らす。

真が乗っている。

珠代の胸にエリカと一緒に撮った写

覆面が壁にかかっている。

珠代、寝ぼけながらアラームを切っ て、再び寝る。 携帯のアラームが鳴っている。

33

○同・受付(朝)

ドカドカと階段を降りてくる珠代。

覆面を被っている。

従業員「行ってらっしゃ……えっ?」 そのまま受付を通り過ぎて出て行く。

○市電・車内(朝)

学生や老人と一緒に、覆面を被った

珠代が乗っている。

皆、チラチラと横目で見ている。

○魚市場通 (朝)

市電が停車する。

中から覆面の珠代が飛び出してきて、

走って行く。

)函館女子プロレス・道場・中(朝)

数名の選手が足を開いて腕立てをし

ている。

道産子、テーブルの上のトランプを 二枚捲って、四と五が出る。

道産子「45」

選手達、腕立てを続ける。

珠代がこっそりと入ってくる。

エリカ「おはようございます」

他の選手達も気づく。

道産子「どうしました?そんな汗だくで」

珠代「走ってきて、その」

道産子「ロードワークなんて珍しい」

珠代「そう、それそれ」

選手達、黙々と腕立てを続ける。 床に汗が滴り落ち、水たまりのよう

になっている。

珠代、 その様子を見て顔を引きつら

せる。

 \times

X

リングの上で仰向けになった選手の

腹の上に立つ、道産子。

道産子「はい、1、2、3、4……」

その場で足踏みする珠代。

下の選手は苦悶の表情。

側で見ている珠代。

「痛い?痛い?」

やられてる選手に聞く。

道産子「エリカ、ミカさんお願い」

珠代「頼んでないって」

エリカ「ミカさん丸太でいいですか」

珠代「なにその合言葉」

エリカ、珠代を仰向けにさせる。

エリカ「行きますね」

珠代「ちょっと、タンマ」

エリカ、丸太を振り上げて、

珠代の

腹に落とす。

珠代「うつ!」

珠代、悶絶しながらゴロゴロとリン

グを転げまわる。

エリカ「ちょっと冗談やめてくださいって」 珠代、そのままリングから落ちる。

× \times

リングの上でブリッジをする選手た

竹刀を持った響子が、ブリッジの甘

い選手の体を叩いて行く。

珠代、立って見ている。

珠代「こんなの無理よ」

珠代、戸を開けて出て行こうとする

と、三人組のエリカファンが、こっ

そりと覗いている。

ファン1「ほら、お前がうるせえからばれた」

響子「練習中は来るなって言ったろ!」

響子、扉を閉めて鍵をかける。

響子「ミカ、助かったよ」

珠代「……」

○同・食堂・中

昼食を食べている選手たち。

一同・表

こっそりと逃げようとしている珠代。

エリカの声「ミカさん!」

振り返る珠代。

エリカ「一緒してもいいですか」エリカがやって来る。

珠代「ああ、うん」

二人、歩いて行く。

○牛丼屋・表

珠代とエリカやって来る。

珠代、牛丼屋に入って行く。

エリカ「ミカさん牛丼食べるんですか?」

珠代「え?」

エリカ「肉は焼肉しか食べないんじゃ……」

エリカ、牛丼屋の隣の焼肉屋を指差す。

珠代「そんな……」

エリカ、焼肉屋に入って行く。

珠代、財布の中を見てため息。

36

珠代、渋々入って行く。

珠代、エリカを見ると左で箸を持っ

ている。

)同・店内

焼肉を頬張るエリカ。

珠代、ナムルをチマチマと食べている。

エリカ「ミカさん、覆面取らないんですか?」

ミカ「家から一歩出たらミカだから、取ら

ない事にしたの」

エリカ「さすが、見習わないと」

珠代、ナムルをつまむ。

エリカ「あれ?ミカさん、それ」

珠代「ん?何?」 エリカ「ミカさん、右利きでしたよね」

珠代「え……あ」

珠代、左手で箸を持っている。

エリカ「私の左利き注意するくせに」

珠代「エリカは昔から?」 エリカ「母親に言われたんですけど、どう

も直らなくて」

珠代「いいの、いいの、

自分が持ちやすい

持ち方で、そんなの」

エリカ「……」

珠代、少し微笑む。

エリカ「午後から練習付き合ってもらえま

すか?」

珠代「うん」

○海岸

海岸線を何度も往復する。 エリカが珠代を肩車して走っている。

珠代がエリカを肩車して走っている。

海岸線を何度も往復する。

珠代「何で私まで……」

)函館女子プロレス・表(夕)

フラフラになりながら、エリカをお

んぶした珠代がやって来る。

到着と同時に倒れる珠代。

エリカ「ミカさん、ミカさん」

)函館女子プロレス寮・表(夕)

二階建てのアパート。

○同・エリカの部屋・中(夕)

ワンルーム。

服や雑誌などで散らかっている。

寝かされている珠代。

覆面を脱がせようとする。 エリカ、珠代の覆面のヒモを解いて、

珠代の顎が見える。

チャイムが鳴る。

玄関のドアを開けるエリカ。

道産子が立っている。

道産子「とりあえず栄養のあるもの買って きたけど、大丈夫か?」

エリカ「なんか今日朝から変でしたから、

具合悪かったのかも」

道産子「遊びすぎなんだよ」

道産子、エリカに食材を渡して帰っ

ていく。

エリカ、部屋に戻ってくる。

珠代が覆面のヒモを締めている。

エリカ「大丈夫ですか?」

珠代「うん」

エリカ「それ、部屋でも取らないんですか」

珠代「うん」

エリカ「ミカさん、しばらく休んでてくだ

さい、私何か作りますから」

エリカ、こじんまりした台所で料理

を始める。

珠代、部屋を見回す。

棚の上に飾ってある写真を手に取る。

子供の頃のエリカが写っている。

珠代「……」

○同・表(夜)

部屋の電気がついている。

)同・エリカの部屋・中(夜)

テーブルの上に食べ終わった鍋。

台所で後片付けをしている珠代。

珠代「エリカ、

鍋持ってきて、エリカ?」

エリカ、 腹を出して寝ている。

珠代「風邪ひくよ」

エリカに毛布をかける珠代。

珠代、散らかった部屋を見回す。

)同・表(朝)

朝日が差している。

)同・エリカの部屋・中(朝)

部屋が綺麗に片付いている。

ベッドで寝ているエリカが目を覚ま

す。

エリカ「……あれ?」

台所に立って朝ご飯を作る珠代。

珠代「エリカ、おはよう」

エリカ「おはようございます」

エリカ、珠代をじっと見ている。

珠代「(気づく) ん?どうしたの?」

エリカ「なんかミカさん、お母さんみたい」

エリカ「あ、すみません。失礼なこと言って」珠代「本当に?」

エリカ「え……」

珠代「いや別に。嬉しいよ」

エリカ、部屋を見回す。

珠代「一応女の子なんだから、部屋ぐらいエリカ「部屋も掃除してくれたんですか?」

綺麗にしとかなくちゃ」

珠代、朝ご飯を持ってくる。

珠代「はい、食べよ、いただきます」

珠代、手をあわせる。

エリカ「いただきます」

チラチラ見る。 エリカ、朝ご飯を食べながら珠代を

○函館女子プロレス・表

エリカをおんぶして走ってくる珠代。

エリカ「ミカさん、いつになったらやる気エリカ「ミカさん、いつになったらやる気

出すんですか」

珠代「試合になったら……」

道産子が出てくる。

道産子「ミカさん、響子さんが探してまし

たよ」

珠代「え?」

○同・事務所・中

椅子に座っている響子。

その向かいに、珠代とエリカ。

珠代「えつ!試合?」

響子「そう、急なんだけど、来週ひろめ祭

りあるだろ?」

エリカ「ああ、南茅部の」

珠代「なにそれ」

エリカ「船漕ぎ競争とかあるやつですよ」

響子「そこで、北海プロレスのイベントが あったんだけど、選手がストライキ起こ

して出ないみたいで、うちに連絡が来て

さ

珠代「そんな!」

響子「タッグマッチの相手はもうすでに決

まってるから中止には出来ないんだって」

エリカ「誰なんです」

響子「キャサリン姉妹」 エリカ「あのキャサリン姉妹ですか」

珠代「え?え?誰?有名?」

ハリケーンの異名を誇る」

エリカ「あのキャサリン姉妹ですよ、

人間

珠代「異名からして危険極まりないけど」

響子「どうする」

珠代「やりません」

エリカ「やります」

響子「どっち」 エリカ「やります!」

珠代「うそ!ハリケーンだよ?」 響子「そう言うと思ってもう承諾しといた

ょ

珠代「してんじゃない」

エリカ「ミカさん、やる気出て来ましたね」

珠代「吐き気だよ」

響子「ミカ、エリカ、 頼んだよ」

エリカ「はい」

珠代「おえつ」

○同・前

携帯を耳に当てている珠代。

珠代「お願い、ミカさん出て」

呼び出し音が続いている。

珠代「試合なんて無理だよ」

一度切り、もう一度電話をかけ直す。

珠代「出て!」

「電源が入っていないか、電波の届か

ない……」のアナウンスが流れる。

珠代「あーもう、どうしよう」

エリカの声「どうしました?」

振り返る珠代、エリカが立っている。

珠代「何でもない」

エリカ「さ、練習ですよ練習」

珠代「……はい」

エリカについて歩く珠代。

)同・道場

入ってくる珠代とエリカ。

数名の記者が選手達の練習風景を撮 っている。

記者「あーどうも、週刊リングです」

X X 珠代、記者に名刺を渡される。

記者「次の対戦相手のキャサリン姉妹につ 記者の取材を受ける珠代とエリカ。

いて伺いたいんですが、印象としてはど

うですか」

珠代「……その、 特には」

記者「はい?」

エリカ「誰が相手でも自分たちのプロレス

をすれば負けないという事です」

記者「最近は空中技以外にも磨いてるもの

があると聞きましたが」

珠代「磨いてるもの……ああ、床?」

エリカ「……」

記者「床?」

珠代「ポリッシャでガーッと」

珠代「難しさで言ったら、かっぱぎの方が 記者「ポリッシャー?難しそうな技ですね」

難しいですね」

記者「かっぱぎ?」

珠代、掃き出す仕草。

記者「おおお……地味ですけど効きそうで

珠代「ポリッシャーからかっぱぎがスムー ズに行けば時間はかからないですね」

珠代「勝利っていうか、まぁそんな感じで 記者「勝利宣言、そう捉えていいですね」

すね」

記者「おおおおおお、いい試合期待してい

ます頑張ってください」

珠代「はい」 エリカ「……?」

○同・道場

腕立て伏せをする珠代とエリカ。

エリカ「二十五、二十六、二十……」

珠代、ずっと同じ体勢のまま固まっ

ている。

珠代「……七」

珠代、テーブルの上のトランプを二

枚選びながらめくる。

「1」が二枚。

珠代「十一」

珠代とエリカ、腕立てをする。

リングの上で仰向けになるエリカ。

エリカの腹の上で足踏みする珠代。

珠代「十八、十九、二十」

エリカ、起きようとするが、珠代の

足踏みが止まらない。

エリカ「ちょっとミカさん_

珠代「……」

エリカ「ミカさんって」

珠代「……」

X X

リングの上に丸太を持ったエリカ。

腹を抑えて悶絶する珠代。

X

深く膝を曲げてスクワットするエリ スクワットをする珠代とエリカ。

力。

腕を大きく振って、ごまかす珠代。

リングの上、向かい合う珠代とエリカ。 ×

エリカ、軽く体をほぐす。

珠代、必要以上に念入りに体をほぐす。

珠代「ちょっと待って」 エリカ「じゃ、いきますよ」

珠代、柔軟で時間を稼いでいる。

エリカ「いいですか?」

珠代「焦らないの」

珠代、大股開いて、四股踏み出す。

エリカ「ちょっとミカさん_

珠代「もうちょい」

エリカ「いい加減にしてくださいよ」

エリカ、リングを降りて出て行く。

珠代「エリカ」

珠代、エリカを追って出て行く。

(夕) (夕)

走っているエリカ。

エリカの後を追う珠代。

エリカ、逃げるように走って行く。

珠代「エリカ!」

珠代、息を切らせながら後を追う。 走り続けるエリカ。

)立待岬(夕)

エリカ、やってくる。

珠代が遅れてやってくる。

エリカ、眼下に広がる津軽海峡を眺

めている。

珠代「何よ。怒ったの?」 エリカ「いえ。ちょっとイライラしてて」

珠代「やだ、今日はあれの日?」

エリカ「この前ミカさんにプロレス始めた

て言いましたよね」 理由聞かれた時に、ミカさんに憧れてっ

珠代「うん、助けたんだよね」

珠代「嘘?」 エリカ「すみません、あれ、嘘なんです」 私を捨てたことを悔やんで、苦しんで苦

エリカ「本当は、有名になりたくて」

珠代「なんだ、そうなの」

エリカ「有名になったら会いに来てくれる かなって思って」

珠代「会いにって誰が?」

エリカ「母です、私を産んでくれた、本当

珠代「エリカ……」 のお母さん」

エリカ「そしたらまさか本当に来るなんて」

珠代「じゃなんであんな態度を……」

エリカ「あんな明るく簡単に、母だと名乗 って欲しくなかったんです」

エリカ「もっと苦しんでるのかと思ってた。

しんで。そのぐらい思ってて欲しかった」

歩き出すエリカ。

その背中を見つめる珠代。

珠代「……思ってたよ。ずっと」

珠代も歩き出し、エリカに追いつく。

エリカ「私はずっと苦しかったのに……」

エリカ「なんでミカさんが謝るんですか」

珠代「ごめん……」

珠代「あ、いや、代わりに」

エリカ「あの人にとって私は、その程度だ ったんですね」

珠代「もし、もしもだよ。もう一度現れた らどうする? その時本気で謝ったら

エリカ「むしろ神経を疑いますね。今度こ

そ私、なにするか分からないと思います」

珠代「ハハ……そうだよね。やっぱり」

エリカ、珠代の背中に飛び乗る。

珠代「え、ちょっと」

エリカ「帰りはいつもミカさんでしょ」

珠代「そうなの?」

ちゃいましたね。早く戻らなきゃ」

エリカ「そうですよ。話してたら遅くなっ

珠代「……戻りたいよ。あの時に」

エリカ「え?」

珠代「なんでもない」

走り出す珠代、真剣な顔になっていく。

○ラーメン屋・中(夜)

カウンターの珠代、

珠代「すいません。ラーメン大盛りと餃子

ライス……」

店員「ラーメン大盛り餃子ライス」 珠代、窓ガラスに映る自分の姿を見る。

ぼてっとした腹をつまむ。

珠代「あ、すいません。やっぱりラーメン

普通盛りで」

○ハコダテヤマ・ゲストハウス・表(早朝)

あたりはまだ薄暗い。

店内から出てくる覆面姿の珠代。

軽くストレッチして走り出す。

地獄坂をおりていく。

神社の前で立ち止まり、手を合わせる。

津軽海峡を左手に、海沿いの道路を X \times X

走っている珠代。

 \times × ×

十字街を通り過ぎ、二十間坂を上が

って行く珠代。

X X

チャチャ登りを上がり、迷う珠代。 X

 \times × X

スクワットをしている珠代。

珠代の足元、汗が滴り落ちている。

X

リングの上で、受け身の練習を何度

も繰り返す珠代。

X X

スパーリングをする若い選手たち。

珠代、じっと動きを観察しながら、

時折ノートに書き込む。

)函館女子プロレス・道場・中(朝) 道場には珠代一人。

が二枚捲られている。

テーブルの上のトランプは「10」

腕立て伏せをしている。

顎を上げて、必死に体を起こそうと

している。

リングの上で腹筋をする珠代。

一回一回辛そうに体を起こす。

○ゲストハウス・珠代の部屋・中(夜)

珠代、ノートを見ながら一人で動き の確認をしている。

○函館女子プロレス・道場・中

エリカ相手にスパーリングをする珠

代。

動きは悪いが、エリカに食らいつく。

× ×

エリカに足を持たせて、腕だけでリ

ングの中を周っている珠代。

×

リングの上で一人腕立て伏せをする

珠代。

腕が上がらず、マットに腹ばいにな

るが、再び腕立てを続ける。

○ゲストハウス・珠代の部屋・中(夜)

きを確認している。珠代、枕を相手にスパーリングの動

○道場・中

道産子の技を返す珠代。
スパーリングをする珠代と道産子。

× ×

エリカを肩車して、スクワットする〉

〈 珠代。

×

×

リングの上で一人受け身の練習をす

る珠代。

道路

上がって行く朱弋。

エリカをおんぶしながら二十間坂を

×××くり、上がって行く珠代。

X

ってくる珠代。エリカをおんぶしながら八幡坂を下

 \times X

リングの上で仰向けになっている珠

代。

とすが、珠代は耐える。 エリカが丸太を珠代の腹に何度も落

○ハコダテヤマゲストハウス・部屋(真夜中)

布団に入っている珠代。

ぶ。

六人乗りの手漕ぎ船によるレースが

行われている。

)同・控室・中

響子が慌てて入って来る。 珠代とエリカがストレッチしている。

響子「キャサリンが空港で捕まったって!」

エリカ「ええつ」

響子「姉の方」

珠代「試合はどうするんですか」

○臼尻漁港

珠代「眠れない……」

と開いている。

真っ暗な部屋の中で、目をパッチリ

快晴。

色とりどりの大漁旗を掲げた船が並 「ひろめ祭り」と書かれた看板。

)同・特設会場

設営されたリング。

アナウンス「本日予定されておりましたメ 周りを囲むように観客が座っている。

インイベント、ミカ・エリカ組対キャサ

り、中止とさせていただきます」リン姉妹のタッグマッチは、諸事情によ

観客のブーイング。

ラス対エリカによる、シングルマッチをアナウンス「代わりまして、ミカ・マスカ

開催いたします」

客席から拍手が起こる。

○同・トイレ・個室

覆面を持つ手が震えている。便座に腰掛けている素顔の珠代。

×

(フラッシュ)

海を見つめるエリカ。

エリカ「あんな明るく簡単に、母だと名乗

って欲しくなかったんです」

○同・リング

吉、ノスラーが応援する観客。

若いレスラーが試合をしている。

)同・トイレ・個室

覆面を持つ手が震えている。便座に腰掛けている素顔の珠代。

× ×

(フラッシュ)

海を見つめるエリカ。

しんで。そのぐらい思ってて欲しかった」私を捨てたことを悔やんで、苦しんで苦エリカ「もっと苦しんでるのかと思ってた。

○同・リング

観客の声援。

けの道産子にダイビングエルボー。

トップロープの響子がマットに仰向

(曲げた肘を相手の体に落とす)

レフリーがカウントを取る。 響子、道産子をフォールする。

レフリー「1、2、3!」

ける。 ゴングが鳴り、響子が勝名乗りを受

をぬって歩きながら、一番前の席に よし子(55)が入ってきて、客の間

座る。

○同・トイレ・個室

便座に腰掛けている素顔の珠代。

手の震えは消えている。

珠代、覆面を被る。

○同・特設会場

男の声「よおっ」

大きな和太鼓の音。

「ひろめ祭り」と書かれた法被にふん

リング横で和太鼓を叩く男たち。

どし姿。

男「よっ」

男「よーおっ」

太鼓を乱れ打つ音が港に響き渡る。

ドドンと大きな音がして演技が終わ

リングアナ「ただいまより~、ミカ・マス 観客の大きな拍手。

いたします。青コーナーからエリカ選手カラス対エリカのシングルマッチを開催

の入場です!」

入場曲が流れ、エリカが入場してくる。

観客たちの拍手。

回す。 リングに上がるエリカ、観客席を見

エリカ「(呟く) お母さん……」 最前列に座るよし子に気が付く。

カメラのフラッシュが焚かれる。

から、ミカ・マスカラス選手の入場です!」リングアナウンサー「続いて、赤コーナー

珠代、観客席によし子の姿を認めて、入場曲と共に、珠代が登場する。

慌てて目を逸らす。

さらに観客が湧く。

立つ珠代とエリカ。 赤コーナーと青コーナーに分かれて

リング下で二人を見ている響子、道

産子、函女の選手たち。

皆「函女」と書かれたTシャツを着

ている。

両者の間に立つリングアナウンサー。

ミカ〜マスカ〜ラ〜ス」リングアナ「赤コーナー、160パウンド〜、

珠代、マントを投げる。

歓声とともに紙テープが投げ込まれ

る。

エ〜リカ〜」リングアナ「青コーナー、100パウンド〜、

リング下の選手たちが、リングに散歓声、紙テープが投げ込まれる。

乱したテープを手繰り寄せて片付け

向かい合う珠代とエリカ、握手する。

珠代「……」

エリカ「……」

ゴングが鳴る。 にらみ合う二人。

ップキックを仕掛ける。

珠代、ゴングと同時にエリカにドロ

不意を突かれたエリカ、飛ばされる。

目を逸らすよし子。

珠代「行くぞ、オラー」

珠代、エリカを立ち上がらせて、ロ

ープに振る。

戻ってきたところをラリアット。(相 が、逆に珠代がロープに振られる。

手の首に自分の腕をかます)

倒れる珠代。

レフェリーが近づいてくる。 エリカ、珠代をフォールする。

レフェリー「1、2……」

エリカ、ロープの反動を利用して珠 返す珠代。

代にドロップキック。

倒れる珠代。

エリカ、珠代を立たせバッグドロップ。

レフェリー「1、2……」

珠代を押さえこむ。

珠代、寸前で返す。

観客「どうした、ミカ!」

戻ってきたところを体当たり。 エリカ、珠代を再びロープに振る。

エリカ、倒れた珠代にストンピング

(足で踏みつける)。

エリカ、珠代を立たせ、ボディスラム。(抱

えた相手を背中からマットに叩きつける) エリカ、珠代に逆エビ固めをかける。

珠代 「あー」

プに近づいてく。 珠代、必死の形相でジリジリとロー

その先に、よし子が座っているのが見える。

珠代「……」

× ×

(フラッシュ)

よし子(3)に頬を叩かれる珠代(17)。

× ×

(フラッシュ)

長洲(30)に肩を掴まれ泣き叫ぶ珠

代 17

X

X

必死に手を伸ばす珠代。

ロープの向こうのよし子に向かって、

ロープを掴む。

観客の拍手。

エリカ、珠代を立たせ、 自分の腰に

珠代を抱え込む。

さらに片方の手でタイツを持って持

マットに叩き付ける。

ち上げ、自ら後ろに倒れ込み珠代を

珠代、苦悶の表情。

エリカ、珠代の右足を取り膝十字固め。

珠代、苦しそうな顔。

レフェリー「ミカ、ギブアップ?」 レフェリーが珠代を覗き込み

珠代、首を横に振る。

這いつくばりながら、 ロープにジリ

ジリと近づく。

珠代、ロープを掴む。

拍手。

珠代から離れるエリカ。

よろよろと立ち上がる珠代。

エリカ「どうした、かかってこい」

エリカ、珠代にボディスラム。

仰向けになって倒れる珠代。

エリカ、コーナーポストに向かい、

トップロープに上がる。

珠代目掛けてダイビングボディプレ

スを繰り出す。

受身もせず、まともに受けて悶絶す

る珠代。

珠代「うう」

エリカ「(呟く) どうしたんですか、ミカさん」 珠代、首を横に振り、よし子を見る。 珠代の視線の先を見るエリカ、よし

子がいる。

エリカ「……」

レフェリー「1、2」

返す珠代。

エリカ、珠代をロープに振って、ド 歓声があがり、大きな拍手。

ロップキック。

珠代、場外に転がり落ちる。

珠代の髪を掴み振り回す。 珠代を追ってリングを降りるエリカ。

エリカ、珠代にラリアット。

珠代の上に乗り、抑え込むエリカ。

観客席に倒れ込む珠代。

珠代を引き戻し、 珠代の股に手を入

れるエリカ。

観客席に向かって投げ飛ばす。

椅子ごと倒れるよし子。 珠代の身体がよし子の上に落ちる。

観客の悲鳴。

エリカ「お母さん!」

珠代「!」

慌ててよし子から離れる珠代。

気を失い、ぐったりしているよし子。

エリカ「お母さん。しっかりして」 よし子に走り寄るエリカ。

珠代「……」

エリカ「誰か、救急車を」

走り出す選手たち、ざわめく観客。

エリカ「お母さん。お母さん返事して!」

反応がない。

珠代「ちょっとどいて!」

エリカを押しのけ、

よし子を覗き込

む珠代。

よし子の口元に耳を近づける。

珠代「……」

よし子に心臓マッサージをする珠代。

泣きそうな顔でそれを見ているエリ

力。

珠代、よし子に人工呼吸する。 覆面が邪魔をして息が外に漏れる。

珠代、咄嗟に覆面を剥ぎ取って、人

工呼吸を続ける。

エリカ「……あ」 その顔を見て驚くエリカ。

響子や道産子も素顔の珠代を見て驚

珠代、夢中でよし子に人工呼吸する。

よし子の胸が大きく上がる。

よし子の口元に耳をあて呼吸を確認

する珠代。

エリカ「……」

咳き込むよし子、目を開ける。

観客が拍手する。

救急車のサイレンが聞こえてくる。

珠代「大丈夫ですか!」

ぼんやりと珠代を見るよし子、驚く。

よし子「あなたは……どうしてここに」

珠代「え?」

辺りを見回す珠代。

皆、驚いた顔で自分を見ている。

ハッとする珠代。

傍らに落ちている覆面を慌てて取る。

エリカ「なんで?」

エリカの声にびくっとして、恐る恐

る振り返る珠代。

エリカ「ずっと、だましてたの?」 険しい顔のエリカと目が合う。

珠代「エリカ、違うの。これは」

エリカに手を伸ばす珠代。

その手を払いのけるエリカ。

エリカ「触らないで!」

珠代「お願い聞いて。これには訳が」 エリカ「何も聞きたくない」

珠代「……エリカ」

救急隊員「大丈夫ですか」 担架を持った救急隊員がやって来る。

よし子「……はい」

起き上がろうとするよし子。

よし子「痛っ」

頭に手をやる。

救急隊員「そのまま動かないで下さい」

よし子を担架にのせる。

救急隊員「どなたか一緒に」

エリカ「私が」

立ち上がるエリカ、担架にのせられ

たよし子についていく。

よし子、担架から珠代を見つめる。

呆然として二人を見送る珠代。

○病院・待合室・中(夕)

椅子に並んで座っているエリカとよ

し子。

エリカ 「悪かったね。試合を台無しにして」 「頭、何でもなくて良かった」

エリカ「ううん」

よし子

よし子「あの人。いつ来たの?」

エリカ「二週間くらい前。突然やってきて

ら今度はあんな姑息な手を使ってくるな 母親面するから追い返したのよ。そした

よし子「……すごいわね」

エリカ「ほんと図々しい」

ほんとに会いたかったのね。エリカに」

よし子「すごいわ。そこまでするなんて。

エリカ「え?」

いる所も、エリカの成長も」

よし子「一度も知らせなかったの。住んで

エリカ「当然だよ。ひどい女だったんでし

よ ?

よし子「ひどいのは、私とお父さんよ」

エリカ「?」

よし子「あの人はエリカを捨てたりしてい

ない。私とお父さんが、あの人からエリ

力を奪ったのよ」

エリカ「どういうこと?」

よし子「……」

(以下、よし子の回想)

○病院・病室・前

立ち聞きしているよし子(3)。

○同・病室・中

ベッドに寝ている珠代(17)。

ベッド脇の椅子に座る長洲。

長洲「体、大丈夫か?」

頷く珠代。

珠代「誰にも知られず、一人で産んで育て

長洲「……いや。いいんだよ」 るつもりだったのに……ごめんなさい」

珠代「赤ちゃん見た?」

長洲「いやまだ」

珠代「早く会って。エリカっていうの」

長洲「エリカ?」

珠代「あの子の名前。お腹にいる時から、

ずっとそう呼んでたの」

珠代「ん?」

長洲「……珠代」

長洲「あの子は俺が育てる」

珠代「でも……奥さんとは離婚できないっ

60

長洲「そうじゃない。あの子は俺と女房で

育てるから」

珠代「……え。意味がよく……」

長洲「珠代のご両親からも頼まれたんだ。

まだ17の珠代にはとても育てられないっ

7

珠代「何言ってるの。そんなことない」

長洲「女房は子どもの出来ない身体で。俺 の両親もそれが一番いいって言ってる」

珠代「そんなのおかしい。あの子は私の子

だよ。私が産んだの。だから私が育てる。

一人で育てるから」

長洲「わかってくれ珠代。もうそうするこ とに決まったんだ。女房も納得したよ」

珠代「勝手にそんなこと決めないでよ。私 は納得できない。だって変だよ。そうで

しょ

長洲「ほんとにすまない。ほんとに」

長洲、深く頭を下げる。

珠代「……私の赤ちゃんはどこ。

エリカは

今どこにいるの?」

その肩を押さえる長洲。

起き上がろうとする珠代。

長洲「こらえてくれ珠代!」

珠代「離して!」

長洲「あの子のことはどうか諦めてくれ。

珠代「離してよ!」

この通りだ。どうか」

長洲「……珠代」

珠代「いや。いやー!」

叫ぶ珠代。

○同・前

聞いているよし子。

目を伏せ、廊下を歩いていく。

(回想おわり)

○元の病院・待合室・中(夕)

並んで座っているよし子とエリカ。

立ち上がるエリカ。

走り出す。

○函館女子プロレス・道場(夕)

響子と道産子が腕組みしている前で、

珠代が深く頭を下げている。

ミカの声「アロハ~」

皆が振り返る。

入り口でミカが、両手にお土産袋を

提げて立っている。

アロハシャツに首からレイをさげて、

真っ黒に日焼けしている。

冷たい視線をミカに投げる、

道産子。

ミカ「れ? どうしたの?」

響子と道産子の間から珠代が見える。

ミカ「あ!」

○海沿いの道(夕)

必死に走っているエリカ。

)函館女子プロレス・前(夕)

ミカに頭をさげている珠代。

ミカ「誰がそこまでやれって言いました?」

珠代「すいません。ほんとにすみません」

「試合中に覆面まで脱いだって?」

珠代「すみません」

ミカ「きっと今頃はファンの間で、ミカは おばさんだったのかと噂になってますよ。

それじゃまるで、 私の方が偽物みたいじ

ゃないですか!」

珠代「すみません」

ミカ「まったくもう!」

ため息をつくミカ。

封筒を取り出すミカ。

ミカ「はいこれ」

珠代「これは」

ミカ「約束のお給料です」

珠代「いいです、そんな。迷惑かけたんだし」

ミカ「取っといてください。今、何も仕事 してないんでしょ」

珠代「すみません。それじゃ遠慮なく」

封筒を受け取る珠代。

ミカ「これからどうするんですか。 エリカ

にもバレてしまったんでしょ」

珠代「函館を出ます。もう今夜のフェリー

も予約しました」

ミカ「え?」

珠代「二週間楽しかった。大事な思い出が

出来ました。ミカさんのおかげです」

ミカ「……最後に、エリカに会って行かな いんですか。お母さんなんでしょ?」

珠代「エリカの母親は、一人です」

ミカ 「……」

珠代「お世話になりました」

ミカ「お元気で」

63

頭を下げる珠代、歩いていく。

○住宅街 (夕)

歩いている珠代。

涙が零れそうになり、ポケットから

ハンカチを出す。

広げるとミカマスカラスの覆面。

珠代「……」

覆面を被る。

ずラダラと落っている。覆面が涙で濡れて、その下から滴が

ダラダラと落ちている。

肩を震わせて歩く覆面の珠代に驚き、

振り返る通行人。

○函館女子プロレス・道場・中(夕)

ミカが掃除をしている。

走って入って来るエリカ。

ミカ「どした」

辺りを見回すエリカ。

ミカ「山田さんなら帰ったよ」

エリカ「帰った?」

ミカ「フェリーで今夜函館を出るって」

エリカ「え?」

ミカ「偽物でもいなくなると寂しい?」

エリカ「……本物だったんです」

ミカ「エリカ」

エリカ「はい」

ミカ「ちょっと頼まれてくれない?」

エリカ「何をですか」

ミカ「勝手に持って行っちゃて、困ってる

のよね」

ミカ「覆面」エリカ「?」

エリカ「……あ」

ミカ「返してもらって来てよ」

ミカ「ほら早く」

エリカ「はい」

走り出すエリカ。

を見つける。

珠代「エリカ」

珠代を探しているエリカ。

デッキから身を乗り出す珠代。

珠代、船から降りようと走り出すが、

汽笛が鳴る。

珠代「エリカー」

と叫ぶが風に声が消される。

慌ててポケットを探る。

紙テープが出てくる。

それを思い切り、エリカに向かって

- 投げる。

テープがエリカの前方に落ちる。

気付いてデッキを見上げるエリカ。

珠代に目が止まる。

○函館ターミナル(夕)

り出して見つめる。デッキに立ち、バッグから覆面を取フェリーに乗り込む素顔の珠代。

珠代「……」

珠代の隣に立つ乗客の一人が、ター

ミナルのウッドデッキに立つ見送り

の人に向かって手を振っている。

強い風に髪を押さえる珠代。

桟橋の向こうから走って来るエリカ エリカー……」

65

船が動き出す。

エリカ、紙テープを拾い、珠代の顔

を見ながら船と一緒に歩き出す。

桟橋と船を繋ぐ紙テープが切れる。

エリカ、桟橋の端で止まる。

珠代「……」 珠代に向かって思い切り手を振る。

エリカが微笑む。

覆面を掲げて、手を振り返す珠代。

珠代も微笑み返す。

エリカの姿が小さくなっていく。

〈おわり〉

本電子書籍は、2015 年 12 月 4 日発行の『第 21 回函館港イルミナシオン映画祭 2015 第 19 回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、審査員奨励賞受賞作品を抜粋したものです。

シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第21回函館港イルミナシオン映画祭2015

第 19 回シナリオ大賞 審査員奨励賞受賞作品

パートレスラー

作:大坪哲郎 溝田美幸

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2016年2月1日 電子書籍版発行

発行:函館港イルミナシオン映画祭実行委員会 函館事務局

〒 040-0055 函館市末広町 4番 19号 (函館市地域交流まちづくりセンター内)

電話 0138-22-1037 http://hakodate-illumina.com/

制作:株式会社新函館ライブラリ

〒 040-0051 函館市弁天町 4番8号

電話 0138-84-1620 http://www.nhakodate.com/